特44
86

流花乳の闇

宗家 橘也明先生校閲

大阪 [illegible]

完

265
109

孟子中庸傳

意緒

明治
43. 6. 27
內交

己酉初夏

柳江題

荒乳の關

玉蘭作

西海の怒濤纔に鎮り
東海の覇業將に成らむとす

今此時機よ惹き起す
逆樽の怨讐取り樽に

あはれ戰功ならびなく
名聲天下に耀ける

九郎判官義經も
兄頼朝と不和を生じ

世の仇浪に揺り揉れ
時しも頃は文治二年
名残惜しくも今出川
消てはかなき粟田口
いつか大津の浦越して
流浪の身とは成り給へり
如月十日の夜深きに
流れ行く身は泡沫の
また来む時をまつぎかや
行方も今はしらひげの

神の御社伏し拜み
海津の浦に著き給ふ
ゆけば程なく越の國
漸くこゝへきたの腰
折しも行交ふ山賤等
寄邊と頼む甲斐もなき
頓て陸路を急ぎつゝ
峯吹く風のあらち山
三の口へも近づけり
ひそめき乍ら袖を引き

悼はや今の修験者共
判官殿とうたがわれ
義經聞て辨慶を招き給ひ
我等を堅く撰ぶ由
偖は君の御下向を計り
行く手の關に懸りなば
憂き眼にあはんと耳語けば
此先きに新關を設け
いかにせばやと仰せける
俄に構へしものと存候
唯打破りて御通り候事
行く方遠き旅の空
機に臨み變に應じ欺りて
辨慶の一議に任せ
我から向ふ燈火に
容易き業には候得共
未こそ殊に大事なれば
靜に御通り然るべしと
こゝろ強くも夏虫の
悠然として進み寄る

茲に加賀の國の住人井上左衛門は
心ならずも山伏を
斯る所に義經主從來りければ
前後左右を押取圍み
左衛門徐に制しつゝ
鎌倉殿の嚴命に依り
詮議の為めに控へけり
スハヤとばかり關守共
是こそ判官の正身よと騒きたり
いかに客僧達是は關にて候ぞ
承り候左り乍ら我等は
羽黒山伏にて候に
何迚斯程に騒動せられ候や
いゝ今度判官殿偽山伏と成り
奥秀衡を頼み御下向の為め
山伏を堅く撰べとの仰に申り
左衛門承りて山伏を停め候へ
左らば偽山伏をこそ停め候へ
分で羽黒山伏の停めらるべきと
辨慶稍氣色ばみて申ければ

左衛門少時傾き居たりしが
異議なく通し申すべし
高下を嫌はず關手を取りて
先づ關手を出し給へと申せる
いつの習慣に羽黒山伏の
五丈寺僧達は眞の伏にておわすら
左り作ら鎌倉殿の御教書に
關守等の兵粮米にせよとあり
偖九新しき事を承る物かな
關手を出す法やある

例なき事は叶ふまじと
然らば關手を取ると取らざるは
此に一同を停置くべしと
辨慶等少しも驚かず
御使上下の程心易く息らはむと
辨慶更に取り合はず
關東へ左右を承り合し候迄
左衛門儼かに申したり
是は金剛童子の御詫らひにや
各笈を關屋に舁入れ

思ひ〳〵に寢つ起きつ
大膽不敵の有樣なれ
是は判官殿にはたはさぬ氣色
急ぎて立たむ氣色もなく
齋料に事缺き候へば
〳〵たり顏に振舞ふこそ
關守共今は氣を奪れ
唯通せやと纔に許され給ひしが
この二三日の間
關屋の糧米少し賜はれと

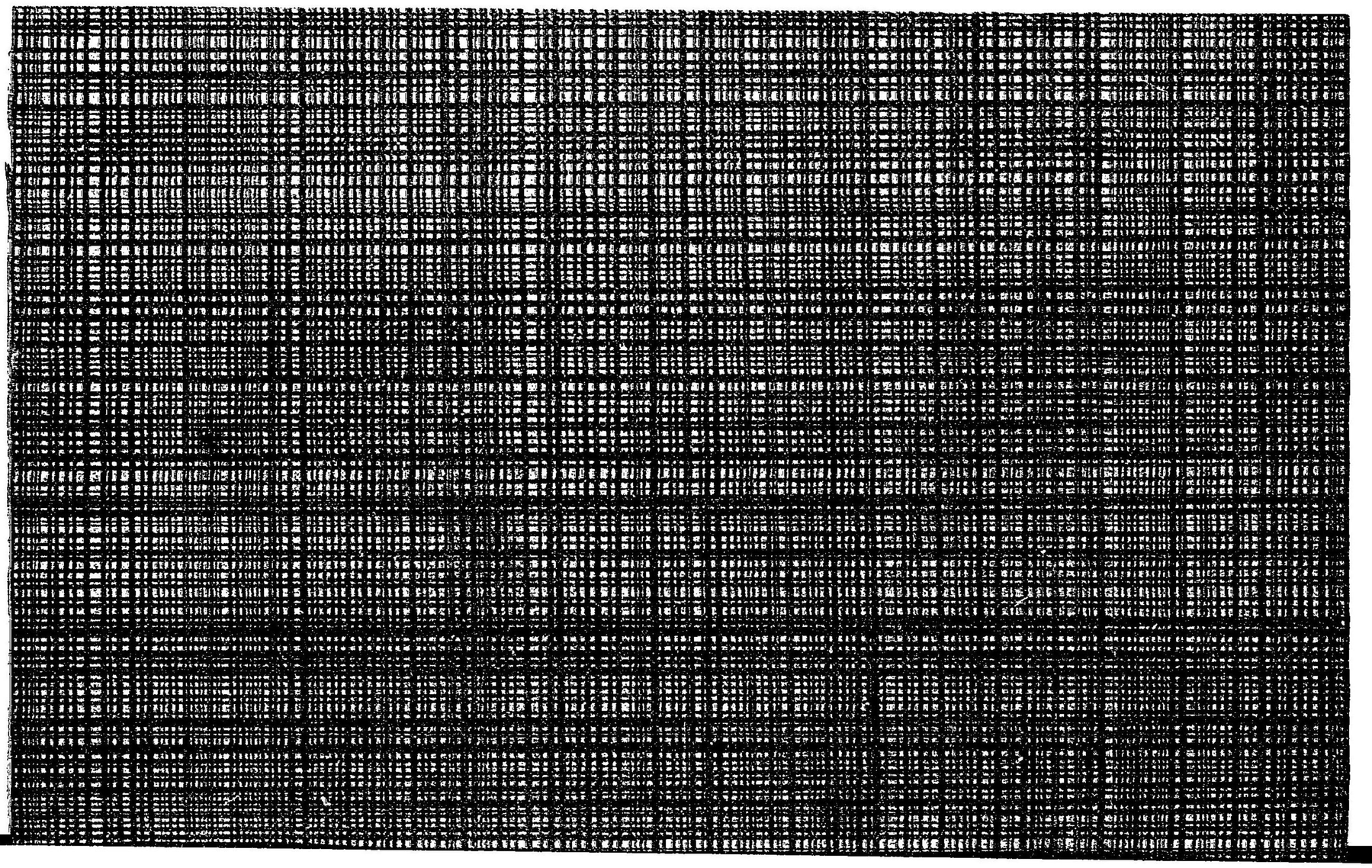
餘儀もなげにも申けり
物も覺えぬ山伏かな
口强に返事を為〳〵
何にも心得難〳〵と推み〳〵ぶ
何にも御祈禱にてこそあれ
關守共あきれたる顏色にて
判官殿かと糺せば
其上齋料迄乞ふ事
左衛門莞爾と打笑みて
それ進らせよと言ひければ

唐櫃の蓋に白米盛て差出す
ヤア大和坊ソレ取れと
義經謹みて請取り給ふ
辨慶頓て腰の法螺貝取出して
いと尊げに祈をこそは始めたり
辨慶これを受けて
態と義經に荒々敷申けるに
心の中こそ痛ましけれ
たびたゝ敷吹き鳴らし
日本第一金剛童子
萬城は十萬の滿山の護法身
初瀬は十一面觀音
比叡山王七社の宮
荒乳の關守留させ奉り
羽黒山の讃岐坊が
奈良は七堂の大伽藍
稲荷祇園加茂春日大明神
願くば判官此道に懸參せて
勳功拔群ならしめ
驗德の程を示し給へ

嗺阿毘羅吽欠と
頼母しげにも關守等
漸くにして一同笈を負ひ
盡きぬ武運や源の
加護もあらちの關越へて

珠數サラ〳〵と押揉めば
聽聞せしこそ笑止なれ
悠々として通りけり
氏を守りの弓矢神
落ち行く姿ぞ勇ましき

明治四十三年六月十日印刷
仝　四十三年六月二十五日發行

發行兼編輯人　大阪市東區和泉町二丁目一番地　有村彌四郎
印刷人　大阪市東區和泉町二丁目一番地　藤井護三郎　電話東四五五九番
印刷兼發行所　大阪市東區和泉町二丁目一番地　藤井改進堂　長電話東二七〇番

265
109